



家庭生活の楽しさ、子育ての喜び

この3月まで本学の学術研究所教授をお務め下さった東京大学名誉教授の山本清先生から新著『これからの政策と経営 ―危機の時代を希望の未来へ』（公人の友社）を頂きました。先生は、これまで政府や自治体、また大学の経営や政策を研究してこられた経営学、政策科学の第一人者です。本書は、「政策と経営の両方が社会問題解決には不可欠である」という観点から、例えば地方創生、感染症対策、温室効果ガス規制、デジタル化、経営を支える人事・組織・財務、そして民主制を保障する情報の持つ力といった具体的諸問題を多角的に検証したものです。

その中で、学校経営に携わる者としても重大な関心を持たざるを得ない「少子化問題」についても、とても重要な指摘をしておられました。「少子化にかかる婚姻や出産は個人意識や行動あるいは社会規範に依存する側面が大きく、政府の経済的支援や新たな組織設置等の従来政策の効果は限定的です」（傍点筆者）。また、「経営だけで政策課題が解決できないことは、保育の無償化を進め、保育所を整備し定員を拡大すれば、待機児童は減少しても出生率の上昇につながっていないことから明らかです。カネとヒト及びモノの資源管理だけでなく、その組み合わせと（潜在）子育て世帯がどう政策を理解し反応するかとの分析とデザインが重要になります。子育て自体の人生での意義や豊かな経験の価値を認識し、子育ての負担を軽減することで、子どもを産み育てる意識を高め行動につながっているかどうかです」（傍点筆者）。

制度設計や政策提言は、山本先生のような専門家の方々にお任せする他ありませんが、ここから先の話は、我田引水です。個人意識や行動あるいは社会規範に依存する側面が大きい婚姻や出産、つまりは「家庭生活の楽しさ」や、子育て自体の人生での意義や豊かな経験の価値、つまりは「子育ての喜び」を若い人たちにどう説いていくのか、それこそ私たち教育に携わる者が引き受けなければならない大切な課題ではないかということです。

ところが、いつの頃からか、社会は魅力的な世界、家庭は退屈な場所といった思い込みが世間には蔓延り、家庭の価値や子育ての意義などを語ることは時代遅れ、いや、むしろ時代を押し戻す態度と強い批判が寄せられることさえある。更には、2022年版「少子化社会対策白書」（内閣府）が示す生涯未婚率は、男性で28.3%、女性で17.8%、このグラフは、1990年代のバブル経済崩壊後に急角度で上昇し、失われた20年、30年といわれる時代、最早家庭生活の楽しさなど語れる時代ではないではないか、また昔のように衣食住を提供するだけでは十分でない、教育的・福祉的な支援、更にヒューマン・リレーションシップによって子どもの“*Well-being*”を実現しなければならない、そう言って201

9年には「子どもの貧困対策の推進に関する法律」さえ制定され、簡単に子育ての喜びなど語れる状況ではないではないか、結局家庭の価値や子育ての意義など説く主張は、社会矛盾の解決をその実力を失いかけている家や親に押しつけるものでしかないと、筆者のような発言を封殺する理屈を探し出そうとすれば、幾らでも並び立てることが出来ます。

ですから、なまじ口を開いて批判を受けるより、賢者の沈黙を決め込む方が、と考える人も多いのかも知れません。でも、教育者は、勇気をもっともっと家庭の価値や子育ての意義を語る必要があるのではないか。なるほど、人類史を鳥瞰^{ちようかん}すれば、かつての狩猟社会や農耕社会、その後の工業社会、そして今日の情報社会、更にはこれに続く Society 5.0 ですか、とまれどの時代を見るにせよ、産業構造の変化に伴い、家庭だって、子育てだって、事実その形態は様変わりして来たとし、これからも変わって行くのでしょう。しかし、だからといって家庭や子育てが無くなるわけではなく、また家庭から子どもを引き離して子育てすればいいとする「家族消滅論」が惨憺たる結果に終わったことは歴史が証明しているところで、正に子どもの“Well-being”を実現するための家庭の価値や子育ての意義が失われていいなどということには決してならないからです。

生きることがそうであるように、順風満帆な家庭生活や心配を伴わない子育てなどありません。にも拘らず、家庭は実に面白い小宇宙、子育ては何より自分の存在意味を実感出来る得難い体験なのですから。

※引用した文中にはカッコ書きでデータが記載されているが、紙幅の制約から割愛させて頂いた。

[>前のページへ戻る](#)